

# 荒木田麗女作『豊臣の辞・大江の賦』翻刻（二）

雲岡梓

本稿は白百合女子大学図書館蔵『豊臣の辞・大江の賦』の「大江の賦」の部分の翻刻である。著者は伊勢の女流文学者、荒木田麗女。

『豊臣の辞・大江の賦』は、麗女の自伝『慶徳麗女遺稿』によると、明和五（一七六八）年から明和八（一七七二）年の間に執筆された作品である。

「大江の賦」は、内題には「賦陸奥羽林」と記されるが、どちらも毛利元就を示す。本文は元就の功績を讃える姿勢で、毛利家の発展を記している。

書誌及び凡例は先号（『日本文藝研究』第六十二巻第一号）と同様であるが、利用の便を考慮し、凡例のみ再掲する。

荒木田麗女作『豊臣の辞・大江の賦』翻刻（二）

## 【凡例】

- (1) 漢字の旧字体は、適宜現行の字体に改めた。
- (2) 一部の漢字表記や底本の仮名遣はそのまま残した。
- (3) 本文には、読み易くするために適宜句読点を補った。
- (4) 本文には、必要に応じて濁点を付した。
- (5) 改行は、原文に従った。
- (6) 丁の変わり目は、一行空白を空けて示す。
- (7) 和歌は、底本と同様に独立させ、一字下げにして示す。

- (8) 「、」「く」「々」などの反復記号は底本のままとした。また、反復記号にも必要に応じて濁点を付した。
- (9) 底本には本文の上に注を掲げている部分があるが、注の部分に関しては翻刻しない。

【翻刻】

\*賦陸奥羽林

\*宝とは玉をもちはずとか、国を治が為なん、世に有難くすめり。

中に\*元就の右馬頭といへるは、

\*大江の流れにて、

広元の末葉なれば、いと貴なる

人がらなれど、年月移りかはり

さまゝ乱れたる世を経ぬれば、

今は鎌倉の昔の栄へには似ず、

安芸の国にしろよしして住みつ、

\*祖父ち、などは其名を世に知ら

る、事もなくて過しつるに、

此人の時に至りてぞ\*三戸の

光も殊更にて、英たる名の

四方にあまねくいきはひは、

尼子の軍をも従へつべきに、

心ざまはた\*三の徳を兼、五の

常を守りて、万の民は草葉

とともになびきしたがへり。

子供さへあまたあるに、

何れかおとりざまなるなく、

とりゝゝにおとなびて、ざえ

などもかしこく、\*家を譲るべきは

更にもいはず、\*吉川の底深き

謀、\*小早川の濁らぬ政は、

\*左右の翼となりぬるより、

\*四百年の墓を起ししもむべなりや。

初の程は\*尼子に従ひて出雲に

\*腰を折つるに、\*義興の主の我方

さまの人にせまほしうして、

\*二王の軍の勝負を一人にかけ

つる\*斎王信にも劣らじとて、

ねもころにをとづれ聞へしより、

\*おほちの陰によりぬ。かゝれば、

\*吉田の戦ひ出来りつゝ、

出雲の方にも\*世衡が間を用ひ

つれど、却てたばかり、端となれり。

さばかりの帥共の競到れど、露

恐るゝ事もなく、よく\*馬將軍が

跡を逐て百をもて五千を破つゝ、

\*唯飛將の龍城にあるがごとし。

此国にては\*千劍破の昔にも通へり。

程もなく大内の家亦\*霓裳

の曲をおどろかして、\*一別

四千里の思ひに悩む事あり。

是はた\*牆の内の禍なれば、

後着みなそむきて、うらみを

報ひん人だになし。さるに、

唯一人心を露しつゝ、

\*嚴嶋に赤壁の古きため

しをおもはせ、

\*雪の夜に淮を渡りしよりも、

功のすみやかなりしかば、打

つゝき多くの国平られつゝ、

昨日今日の仇なりし人も

やがて弓箭の卒となりて

追従しありき、いつしか山陰

山陽の二つの道ひらけて、

関の鎖しも固からず。

\*賤が杵歌も声しづかに

なん。なをあらじに、筑紫の

方をも治めんとて、軍を

出しつれど、はか／＼しき

事もなくて日数を經に

ければ、さすがに所々の戍り

おこたるとはなけれども、

ひまを窺ひつゝ、大内は再び

\*漢室を興さん事をはかり、

尼子も亦\*越王の恥をすゝがんとて

取々に境を侵しつれば、

又いかさまにかと打傾く人々

有にぞ、さらば先近き愁ひを

断てこそ、遠き思ひやりは

せめとて、帥て帰らんとす。

道の程\*誠に千里の目を傷ましめ、

九折の魂を驚すばかりなり。からうじて国に來り着つゝ、

又みだれたるところゝ

そむく罪をとひなどして、国々の

掟正しくしつれば、幾程なくて

\*仇の風も静まりつ。すべて

遠近の海山は波の音もなく、

雲の立居もやすらかに歳

行にぞ、今は思ふ事なげなるに、

唯あかぬ事とは\*霞の衣逆に

着たる歎なん、なべての世の

有さまとはいへど、いとにおしう

てぞ。されど\*二葉の松の生先

見えたるなん、末頼もしく、又

なき形見なめれ。終は\*領

すべき

国十にも領りぬれば、天が下に  
其名いちしるく、あへて肩を  
並べ、轍を同じうする人もなし。  
さるは弓矢の道のみにもあらず。

君に仕ふる志も亦切なれば、  
絶にし事をも継、廃れたる  
をも興さんの心づかひもまめ  
やかにて、\*御国譲の料をも  
調じて奉りしより、君の御  
おぼえもめでたくて、位山に

分入ては\*椎葉を折、又  
大宮人のこゝろざまにも

かよひて、\*いとまある折々は  
桜をかざし、紅葉をめでて、  
言の葉の色をそへつゝ、

\*和歌のうら路もたどる

ましげなり。かく\*六の国  
もたいらかになりぬれば、

両鬢の霜も隠れなく、\*古へ

より稀なりといふなる春秋も  
過行に、残の齡ゆたかにたも  
つべき\*菟裘の地をだに卜す。

唯明暮改城畧地の謀怠らで、

\*露宿風餐の辛苦に堪つゝ、

末葉の栄をのみ心にかけし

本意たがはで、正木のかつら  
ながくつたはり、今の世までも

其家のいきほひことなるは、

一人のいさほしによれり。

むべしも\*龍門原上の土に

骨を埋むといへ共、遣れる

名の芳しさは又たくひ

あらんや。

埋れぬ光ぞ世々に残りける

\*つるぎは秋の霜となれども

○賦陸奥羽林 陸奥羽林の賦。毛利元就は永禄三年（一

五六〇）二月、従四位下に昇叙し、陸奥守に任じられた。羽林は中将・少将の唐名。「陸奥羽林の賦」とは、

元就の賦の意。

○宝とは玉をいはずとか 「たからとはたまをいはずよのために君ををさむるうつは物なり」（藤原為顕『夫

木和歌抄』）

○元就の右馬頭 毛利元就は室町時代後期から戦国時代

にかけての、中国地方の戦国大名。安芸の小規模な国人領主から中国地方のほぼ全域を支配下に置くまでに勢力を拡大した名将。本姓は大江氏。元就は天文二年（二三三）九月、従五位下に叙位され、右馬頭に任じられた。

○大江の流れにて、広元の末葉なれば 毛利氏は鎌倉幕

府創業時の功臣大江弘元の血筋である。弘元は元暦元年

（一一八四）源頼朝の招きによって京都から鎌倉に下り、

公文所の別当となつて頼朝の政治を補佐した。特に頼朝

に守護・地頭の設置を献策したことで知られる。毛利と

いう苗字は、弘元が与えられた相模国毛利荘の荘名に由来する。元就は広元の十三代末。

○祖父ち、 元就の祖父は毛利家四十八代当主毛利豊元。父は毛利家四十九代当主毛利弘元。

○三尺の光 「三尺の剣の光は氷手に在り 一張の弓の勢は月心に当る」（陸暈『和漢朗詠集』巻下「將軍」）「三尺

の光」は、剣が輝いていること。武勇が優れていることの例え。

○三の徳を兼、五の常を守りて 三徳は、人または君主として身につけているべき三つの徳目。智・仁・勇の三

つ。五常は、人または君主として常を守るべき五つの徳目。仁・義・礼・智・信の五つ。

○家を譲るべき 元就の嫡男毛利隆元。

○吉川 元就の次男吉川元春。吉川興経の養子となり、天文一九年（一五五〇）吉川家の当主となった。

○小早川 元就の三男、小早川隆景。小早川家を継ぎ、兄吉川元春と共に「毛利の両川」と呼ばれる。

○左右の翼 吉川家と小早川家が宗家である毛利家を助ける、毛利両川体制のこと。

○四百年の墓を起ししもむべなりや 漢の劉邦が、農民の出身ながら天下を統一し、前後合わせて四百年間続く漢王朝を築いたこと。毛利家の繁栄を漢王朝に例えている。

○尼子 出雲の戦国大名尼子晴久。出雲・隠岐・備前・備中・備後・美作・因幡・伯耆守護職。尼子経久の嫡孫。

○腰を折つるに 保身のために小人に頭を下げ、屈服すること。

『潜歎して曰く『我五斗米の為に腰を郷里の小人に向つて折る能はず。』即日印綬を解いて職を去る。』（『宋書逸伝』）

○義興の主 大内義興。周防の戦国大名大内氏の第三〇代当主。室町幕府の管領代となつて將軍の後見人となり、周防・長門・石見・安芸・筑前・豊前・山城の七ヶ国の守護職を兼ねた。

○二王の軍の勝負 楚の項羽と漢の劉邦を漢覇二王という。この二人が秦王朝滅亡後の政權をめぐつて争つた楚漢戦争を指す。

○斎王信 斉王漢信。漢信は楚漢戦争最後の戦いである垓下の戦いの際、劉邦の求めに応じて三〇万の軍勢を率いて参戦した。これを見て諸侯も続々と漢軍に参戦する。漢軍は垓下に楚軍を追い詰め、垓下を脱出した項羽は烏江で自決し、五年に及んだ楚漢戦争はようやく終結した。

○おほちの陰によりぬ 「大内」に「橋」をかけ、陰に寄るといった。元就が大永五年（一二二五）に尼子氏と手を切り、大内義興の傘下となる立場を明確にしたこと。

○吉田の戦 吉田郡山城の戦いは、天文九年（一五四〇）

年）から天文十年（一五四一年）まで安芸国吉田周辺で行われた、大内氏に従属していた毛利氏当主・毛利元就と尼子詮久（後の尼子晴久）との戦い。郡山合戦とも呼ばれる。

○世衡が間 種世衡が行った反間計。反間計とは、敵の間者や内通者を利用する計略。宋王朝の種世衡は青澗城を守備していた際、一人の異民族の部将を叱責し、鞭打ちの刑に処した。その部将は西夏国の君主である李元昊のところへ逃げこんだ。李元昊はその部将を信任し、西夏国の枢密院に自由に出入りさせた。一年後、その部将は西夏国の軍事機密をすべて知って、種世衡のもとに戻った。その部将は種世衡の間者であった。この故事による。（魏秦『東軒筆録』）

郡山籠城戦の際、元就の側近に内別作助五郎という右筆がいた。この男は尼子詮久の命をうけた間者であった。元就はこの男が間者であることを承知の上で召抱えており、尼子方が攻めてくると伝えられたとき、元就は重臣や助五郎の前で「尼子軍が青山に本陣を構えたら良

いが、もし青山に本陣を張られ防府方面への道を塞がれたら困難な戦になる」と戦略を語った。助五郎は、これを詮久に伝えた。しかしこれは攻め込みやすい青山に陣を置かせるための元就の謀計であった。このことを指す。

○馬將軍が跡 後漢末期から三国時代の蜀漢の武將、马超のこと。

○唯飛將の龍城にあるがごとし 「秦時の明月漢時の関万里長征して人未だ還らず 但龍城の飛將をして在らしめば 胡馬をして陰山を度らしめず」（王昌齡「出塞」）飛將は、漢の李広。匈奴に恐れられた名將。龍城は匈奴の本拠地。

○千劍破の昔 楠木正成による千早城の戦いのこと。幕府軍数百万騎に対して、千早城に籠城した楠木軍は千人足らずであったと言われるが、正成は地の利をいかした奇策で幕府軍を翻弄し、幕府軍は囲みを解いて敗走した。

○霓裳の曲をおどろかして 「驚かし破る霓裳羽衣の曲」（白楽天『長恨歌』）霓裳羽衣の曲は、唐の玄宗皇帝が月宮



殿で聞いた曲を写したという舞曲。安祿山の叛の際、玄宗皇帝のもとに攻め入った反軍が霓裳羽衣の曲を舞っていた宴席を驚倒させたこと。

○一別四千里の思ひ 「洛城一別四千里」（杜甫「別れを恨む」）安祿山の叛によつて故郷洛城を追われた恨みを詠む。「一別四千里の思ひ」とは、一刻も早く敵の根拠地を破つてほしいという気持ち。

○牆の内の禍 牆はかきねのこと。牆の内の禍とは、身近に起こる心配ごとや家族の内輪もめ、内乱などをいう。大内義隆が、天文二十年（一五五二）八月、家臣陶晴賢の謀反によつて自害に追い込まれた事件を指す。

○厳嶋に赤壁の古きためしをおもはせ 厳島の戦。安芸・備後両国を支配下に収めた毛利元就が、大内氏の勢力を引き継いだ陶晴賢に対抗し、安芸の厳島に進駐した二万の陶軍を四千余の軍勢で急襲して全滅させた戦い。この戦いによつて毛利氏の中国地方制覇の道がひらける。

○雪の夜に淮を渡りしよりも 唐の憲宗の時代、裴度が雪の夜に淮水を渡つて奇襲を行い、蔡州に攻め入つて呉

元済を破つた故事に基づく。

○賤が杵歌も声しづかに 杵歌は、杵で物をつく時になう歌。「うたふらしよををさまれといはくらのむらの諸人諸声にして」（『夫木和歌抄』）

○漢室を興さん事をはかり 劉邦の開いた漢王朝が、いったん滅亡したのち劉秀によつて再興された故事による。

○越王の恥 会稽の恥のこと。春秋時代、越王勾践が会稽山で呉王夫差に敗れたが、後年呉を討ち、この恥をそそいだという故事。

○誠に千里の目を傷ましめ九折の魂を驚すばかりなり 「既に千里の目を傷ましめ 還九折の魂を驚かす」（『魏徴『唐詩選』巻一「述懷」）

○仇の風 「唐土に至らむとするほどに、あたの風吹きで、三つある船二つはそこなはれぬ。」（『宇津保物語』「俊蔭」）仇の風は、仇や害をなす烈しい風。

○霞の衣逆に着たる歎 「木の下のしづくにぬれてさかさまにかすみの衣着たる春かな」（『源氏物語』柏木巻）永

禄六年（一五六三）八月、嫡子隆元が四十一歳で元就に先立って没したこと。

○二葉の松 隆元の嫡子輝元を指す。

○領すべき国十に 毛利家はその最盛期には、安芸・周防・長門・備中・備後・因幡・伯耆・出雲・隠岐・石見・美作・筑前の十二ヶ国を領有した。

○御国讓の料をも調じて奉りし 元就は永禄三年（一五六〇）一月に即位した正親町天皇に多大な献資を行い、その即位式を実現させた。

○椎葉を折 正親町天皇の即位式を実現させたことによつて、元就が従四位下陸奥守に任じられたことを指す。

「椎」に「四位」をかける。

「のぼるべきたよりなき身は木のもとにしみを拾いて世をわたるかな」（源頼政『平家物語』巻四）

○いとまある折々は桜をかざし 「もししきの大宮人はいとまあれや桜かざして今日もくらしつ」（山部赤人『新古今和歌集』巻二、春歌下）

○和歌のうら路もたどるましげなり 元就は和歌を能く

し、『元就卿詠草』『贈従三位元就卿御詠草』『春霞集』と呼ばれる詠草がある

○六の国もたいらかなりぬれば、両鬢の霜も隠れなく「六国平げ来る両鬢の霜」（李鄩『三体詩』「江上に王將軍に逢う」）諸国を平定するうちにすっかり年老いてしまったことの例え。

○古へより稀なりといふなる春秋 「人生七十古来稀なり」（杜甫「曲江」）元就が七〇歳を過ぎたことを示す。

○菟裘の地 「菟裘」は地名で、今の山東省泗水県の北。春秋時代、魯国の隱公が隱居しようとした地。転じて隱居地を指す。

○露宿風餐 風にさらされ露にぬれて野宿すること。

○龍門原上の土に骨を埋むといへ共 「龍門原上の土に骨を埋むとも名を埋めず」（白居易「故の元少尹が集の後に題す」）龍門は元宗簡の墓地。名声が埋もれず後世に伝わることの例え。

○つるぎは秋の霜となれども 「秋の霜」は、はかなく消えやすいものの例え。つるぎが秋の霜となるとは、武

力が衰えること。後に毛利家が関ヶ原の戦いで敗れ、領地を周防・長門の二国に減らされ、力が衰えたことを指すか。

### 【解題】

「大江の賦」は、毛利元就の出自から語り起こし、元就が毛利家を発展させて行く過程を記している。そして、麗女の生きた江戸時代まで脈々と続く毛利家の繁栄を元就の功績とみて、それを讃える姿勢で執筆しているのである。

中心的な内容としては、元就が尼子氏や大内氏との戦を経て、小国の領主から徐々に領土を広げていく様を、その武略を強調する形で描いている。

しかし、前号に掲載した「豊臣の辞」と同じく、戦いの場面においては中国の故事を多く引用することで内容を連想させるに留め、戦闘を具体的に記述することはない。非常に暗示的な表現となっている。

様々な中国の故事や詩文、日本の物語や和歌を引用し

ていることから麗女の学識の深さが窺えるが、そのことによって非常に難解な文章となっている。

このような執筆方法から、麗女は戦乱の世を生き抜いた元就の武人としての実像を描くのが目的ではなかったと考えられる。麗女の目的は、文武を兼ね備えた英雄として元就を美化することにあつたのである。

なお、本稿では書名を「大江の賦」としているが、実際は外題に「大江の賦」、内題に「賦陸奥羽林」と記されている。

まず「大江の賦」であるが、これは毛利家の祖が鎌倉幕府の功臣大江弘元であり、本姓が大江氏であつたことに依つた題名である。

一方「賦陸奥羽林」は、元就が陸奥守であつたことに依る題名である。

両者ともに「元就の賦」であることを意味し、どちらが適当とも定めたいが、本稿では所蔵館整理名に従つて「大江の賦」としておく。

\*

本稿の執筆にあたり、『豊臣の辞・大江の賦』の翻刻及び掲載を許可して下さった白百合女子大学図書館に、深く御礼申し上げます。

（くもおか あずさ・関西学院大学大学院  
文学研究科博士課程前期課程）